

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
1-1 北海道支部	鳥越 俊彦	札幌医科大学医学部	令和4/5年度北海道支部選出理事に立候補いたします。私は令和2年度から同理事を務めており、今回の立候補は2期目となります。未曾有の新型コロナ禍のなか、オンライン・オンデマンド会議システムを駆使して北海道支部のさまざまな会議、講演会、学術集会を開催し、学術活動の質を落とすことなく、支部を運営して参りました。昨年度延期しました病理夏の学校も、本年度10月に開校の運びとなりました。2期目の北海道支部長としての抱負は、「北海道病理医ネットワークの強化と若い病理医の育成」を挙げさせていただきます。オンライン会議のメリットを最大限に生かした支部運営と専攻医のリクルートを積極的に進めたいと思います。また2期目の学会理事としては、用語委員会、研究推進委員会などの使命を着実に果たし、特に令和5年度の第19回病理学会カンファレンス(札幌)を盛り上げたいと思いますので、どうぞご支援のほどお願い申し上げます。
1-2 東北支部	古川 徹	東北大学	立候補にあたって、以下の2点について重点的に進めたい。1)病理医を増やす取り組み：病理学を魅力ある研究、診療分野として学生や研修医、臨床医により一層認識させるため、支部集会において学部学生、研修医による発表の機会を増やす、奨励賞等のインセンティブを与える、初学者に有用な病理診断・研究セミナーを開催する、COVID禍で形式を再考する必要がある夏の学校の取り組み、臨床医への病理の魅力のアピール等をアレンジしたい。2)研究アクティビティを上げる取り組み：研究の価値をわかりやすく提示することが重要であり、研究を日常の病理診断業務と切り離して考えるのではなく、病理標本を観察する際の小さな気付きや病態の本質を考えながら標本観察することが研究に展開していき、研究成果を発表することがエキスパートとして国内及び国際的に認知されることにつながり、世界に影響を与えることができることを示す取り組みをしたい。
1-3 関東支部	中村 直哉	東海大学医学部基盤診療学系病理診断学	支部会は、第一線で診断している病理医とともにあります。関東支部会は年4回の例会を開催し、例会長のご尽力により日々の診断に役立つような講演や情報提供のほか、時により基礎的もしくは臨床的な講演がなされています。また、はからずもハイブリッド形式は会員のニーズを満たすことになりました。問題点と言えば関東支部会の症例提示はハードルがあり、なかなか症例が集まらず例会長がご苦労されています。若手病理医に興味を持って貰えるような症例提示など、支部会役員の皆さまや1都7県でそれぞれ開催されている交見会と協力していきたいと思います。また「病理学サマーセミナー夏の学校」をきっかけに病理医になる方を期待して今後も継続してまいります。病理医間の交流と日々の病理診断に資するような魅力ある支部会を目指し、少しでもお役に立ちたいと考えています。
1-3 関東支部	笹島 ゆう子	帝京大学医学部病院病理部	医学・医療の日進月歩とともに、病理学会や病理医を取り巻く社会環境は日々変化し続けており、要求されるニーズはますます増え多岐にわたっています。これらに直面し、病理医として、病理学会員として何をすべきか、何ができるか、立ち止まってしっかり考えるべき時が来ています。私は、病理専門医資格取得以来20年超、病理診断業務を中心に研鑽を積み、直近10年は大学付属病院の勤務医として卒前卒後教育や研究、学会活動にも携わってきました。またこの間、研修プログラム審査委員会、専門医資格審査委員会、精度管理委員会等の委員を務めさせていただきました他、病理専門医試験実施委員を複数回務めさせていただきました。これらの経験を元に、病理診断精度の向上への貢献はもとより、今求められている病理医像を追求し次世代の病理医を育てるべく尽力してまいりたいと思っております。どうぞよろしくごお願い申し上げます。
1-4 中部支部	村田 哲也	J A 三重厚生連鈴鹿中央総合病院	昨年4月より中部支部支部長を拝命いたしております。想定外のコロナ禍のため、各種会合など支部会員の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、何とか方法を模索しつつも支部の会合を継続することができました。この危機的な状況も、皆様のご理解ご協力のおかげで何とか凌いでこれました。とはいえ、会合の開催だけでなく標本配布を含めた支部会計のあり方など、まだ宿題が残っております。まだまだ先の見通しは立てにくい状況ですが、もう1期頑張って、支部会員の皆様のお役に立ちたいと考えています。よろしくごお願い申し上げます。
1-5 近畿支部	羽賀 博典	京都大学医学部附属病院	日本病理学会近畿支部では、臓器別、分野別にテーマを決めて年に4回の学術集会を開催し、レベルの高い活動を行っています。私は学術委員会の委員長として支部活動のお手伝いをして参りました。この経験を踏まえてこのたび支部選出理事に立候補致します。
1-6 中国・四国支部	池田 栄二	山口大学大学院医学系研究科病理形態学講座	中国・四国支部長を拝命し1年半が経ちました。就任早々、新型コロナウィルス感染拡大により支部活動自体の停止の危機に直面し、当初掲げた学術的側面の充実目標はひとまず保留とし、まずは「支部活動を止めない」ことを最優先事項と致しました。Web会議システムをいち早く導入、支部会員の皆様の熱意あるご協力を得て、支部活動の基盤である学術集会を1回も中止・延期することなく開催することができました。結果的には、ポストコロナ時代にも対応した新時代の活動基盤が構築されたとも捉えております。一方、病理医に課せられる新技術(遺伝子診断、AIなど)により病理診断業務の在り方、病理分野の学術的側面は変遷し続けます。その変遷に病理医が柔軟に対応するため、また若手病理医の研究マインドを涵養するため、大学や病院の枠にとらわれない土壌ともなり得る「業務と学術のバランスがとれた支部体制」を模索し続けたいと考えております。
1-7 九州・沖縄支部	久岡 正典	産業医科大学医学部第一病理学教室	この度令和4・5年度の地方区選出理事(九州・沖縄支部)に立候補させていただくことにいたしました。鍋島一樹現理事(支部長)から業務と運営を円滑に引き継ぎ、支部の活動をさらに発展できるように努めていく所存です。この1年半余りはコロナ禍のために、行動制限等の様々な制約や支障がある中、支部会員のご協力と理解によって支部の運営が何とか維持されてきたところです。この影響はもうしばらく継続するものと見込まれますが、支部の学術委員長としてこの5年間に培った様々な組織運営や学術活動のノウハウや知識も生かしながら、年6回のスライドカンファレンスの開催などの既定の活動はもとより、会員相互の交流や病理医の生涯教育、若手病理医の育成とリクルート活動、出産・育児に関わる女性病理医の支援を含む病理医の働き方改革についての提言などもリードして行きたいと思っております。つきましてはご支援のほどどうぞよろしくごお願いいたします。

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
全国区選出理事	小田 義直	九州大学大学院医学研究院形態機能病理学	9年前から全国理事、5年前から副理事長としての活動を行ってきました。以下の3点に重点を置きその実現に邁進してゆきます。リサーチマインドを持つ病理医育成：様々な学会の学術活動活性化に貢献し、2016年病理学会カンファレンスを、2020年に学術発表の場である日本病理学会学術総会をお世話させていただきました。さらにゲノム研究用・診療用規程を策定しその普及に努めました。「病理学者」の面を併せ持つ病理医育成に努めます。国際感覚豊富な病理医育成：日英・日独・日欧病理学会交流事業、アジア諸国との交流を充実させ若手病理医の目を海外に向け、日本の病理学を積極的に海外へ発信することを目指します。病理専門医数の増大：病理業務に積極的に働き方改革を導入しワークライフバランスを確保し、Web教育の積極的な導入も目指します。病理学会活動を魅力あるものに改革を進め、次世代の病理専門医を増やす努力を継続します。
	豊國 伸哉	名古屋大学大学院医学系研究科	この度、日本病理学会全国区理事選挙に再度立候補させていただきました。私は医学部卒業・初期臨床研修の後、34年間に渡り病理学教室に所属し、病理学の教育・研究・診断業務に日々携わってまいりました。その間、大きな変遷がありましたが、そのコアは「基礎研究の成果が病理診断に還元され、諸先輩方の努力により医療における病理専門医の立場が確立され、病理専門医が治療法選択に深く関わるようになったこと」と理解しております。病理学において、基礎研究と病理診断はいわば車の両輪であり、基礎研究の発展なしに病理診断の発展はありえません。さらに、基礎研究成果の社会還元過程においても、病理研究医の重要性は増すばかりです。この解決には、医学部学生のうちから病理学に多くの若者を引きつけることが極めて重要です。私はこれまでの経験を十分に活かしながら、特に学術とリクルートを通じて日本病理学会の発展のために全力を尽くす所存です。
	伊藤 智雄	神戸大学医学部附属病院病理部	現在、病理は激動ともいえる時期にきています。AIやデジタルパソロジー、がんゲノムなど大きなうねりが来ております。私はこれまで、若手育成・情報発信の必要性を強く訴え、積極的に活動してまいりました。病理学会の「市民向けパンフレット」「市民向け動画」の作成、また市民向け広報として「HANSHIN健康メッセ」や、「健康未来EXPO2019」などで、病理の重要性を若い親子世代に発信する取り組みをしてまいりました。また、「全国大学病院病理診断科・病理部会議」議長を務め、将来visionの策定などを進めております。今後とも学生、研修医、そして社会への情報発信などを推し進め、新たな時代に対応する病理学会の将来のために貢献してゆきます。話しやすい性格を活かし、様々な問題に対して会員皆様のご意見を広く拝聴しながら、病理学会のよりよい運営へと反映させたいと考えます。ご支援を何卒よろしくお願いいたします。
	田中 伸哉	北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室	日本病理学会全国区選出理事選挙に立候補致します。これまで3期6年理事として学会運営に関わらせていただきました。病理医を取り巻く環境はコロナ禍・社会のDX化など変化し続けています。ゲノム医療も発展する中で病理医の地位の確立、医療安全、分子病理専門医制度の設立など重要課題に取り組んで参りました。今後さらにきめ細かい診療報酬の改訂、若手リクルート、デジタルパソロジー、単位の電子化なども大切な課題です。英文機関誌PIの発展も重要です。これらの課題に取り組む病理学が輝き続けるために重要なことは、臨床病理と実験病理のバランスのとれた発展と考えています。若手医師が一人でも多く病理医を目指すように病理診断の魅力、醍醐味を伝えていきます。また病理学教室の基礎研究が他分野とは一味違う魅力があることを啓蒙します。診断と研究がシンクロナイズして大きく学会が発展できるような運営を目指します。
	森井 英一	大阪大学大学院医学系研究科病態病理学・病理診断科	病理学は医学の根幹をなし、医療の様々な局面で病理診断医の責務がますます重要視されています。私はこれまで、医療業務委員長、ガイドライン委員長、そして直近4年は病理専門医制度運営委員長として各方面の先生方や関連学会と共に働きやすい体制構築に努めてまいりました。専門医機構とも多くの折衝により病理医独特の事情を鑑みた研修内容の充実やコロナ感染症により予定の研修が困難な場合の要件緩和などを実現してまいりました。ワークライフバランスを保ちながらいかに病理診断を行なうか、解決すべき問題が山積しています。再選させていただいた場合には、これらの取り組みに一層汗を流す所存です。病理医は病態を日々観察し研究の着想を得やすい環境にいます。病理診断とともに病理研究の推進、特に活力ある若手研究者の育成のため、みんな元気に働ける環境を作りたいと強く思っております。何卒ご支援賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
	金井 弥栄	慶應義塾大学医学部病理学教室	がんゲノム医療が実装された今日、治療に直結するゲノム情報を提供し得る病理診断は、益々重要性を増しています。さらに病理医は、臨床病理学的な洞察を活かして、病理組織検体のオミックス研究等に強みを発揮すべきです。病理診断とデータ駆動型研究の相乗効果を目指してきた私の経験を、この変革の時期に活かし、学会運営に尽力させて頂きたく、立候補を決意致しました。分子病理専門医が各施設のエキスパートパネルで活躍できるよう、進歩し続ける“ゲノム病理診断”の最新知見について、生涯学習の機会を設けます。研究の魅力を発信して若手病理医のリクルートをはかり、研究奨励事業等を充実させます。学会主催シンポジウム等を通じて、学際的疾患研究における病理学の貢献を産学官にアピールし、研究推進に努めて参ります。医療の中の病理診断の役割と学問としての病理学の価値を高め、後進を育成する機会をお与え頂きたく、何卒宜しくお願い致します。
	鬼島 宏	弘前大学大学院医学研究科病理生命科学講座	今期、全国区選出理事を務めさせていただき、主に4点につき実践いたしました：（1）生涯教育システム構築（専門医試験レベルのe-learning）、（2）外部精度管理NPO事業を通じた病理精度保証の実践、（3）若手病理医の育成・学生発表、（4）Pathology Internationalへの貢献。これらは、生涯教育委員会（委員長）・日本病理精度保証機構（理事長）・精度管理委員会・希少がん病理診断支援検討委員会・癌取扱い規約委員会等を通じて行っています。地方大学にふさわしい教育・研究環境を整備し、多くの若手医師・大学院生と共に病理学の研鑽に励んでいます。上記4点で特に（1）生涯教育の充実、並びに（2）病理標本作製・病理診断の外部精度保証は、社会の要望も強く、日本病理学会の重要課題であり、更なる尽力が必要です。次期も理事を務めさせていただきたく、学会が将来にわたり発展するよう奮励努力いたします。
	大橋 健一	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科	この度日本病理学会全国区選出理事に立候補させていただきました。私はこれまで関東支部選出理事を務め、専門医制度、医療業務、男女共同参画、人材育成などに関する委員会活動に携わってきました。特にCOVID19感染下においても、支部学術集会、夏の学校をwebを活用して運営し、専門医試験もVSシステムを導入しながら円滑に実施することができました。現在病理学会においては様々な問題がありますが、特に以下の問題に重点的に取り組みたいと思います。1. 病理医のリクルート問題、基本領域の中で唯一病理だけが専攻医が減少しています。2. COVID19感染の影響下における円滑な専門医研修プログラムと専門医試験の実施、3. 衛生検査所に関する諸問題の解決、4. 病理医による研究活動の活性化です。会員の皆様のご協力をいただきながら諸問題に取り組み、病理学会全体の発展に力を注ぐ所存ですので、ご支援よろしく申し上げます。
	谷田部 恭	国立がん研究センター中央病院	現在、がん診療が腫瘍の分子生物学的特徴をもとにした個別化医療に移行する中で、病理医に新たな役割が求められるとともに、形態診断の重要性は変わることがなく、結果として病理医が果たすべき業務は増加・多様化しています。私は大学院修了後25年間、一貫してがん専門病院に所属し、診断病理医として勤めてきました。この中で、市中病院が大学とは異なる力学によって成りたっていること、そして臨床現場が行政によって大きく影響を受けることを学びました。今回理事に立候補させていただきました。これまでの経験を生かし、大きく変化しつつある病理医を取り巻く状況に対応するための環境整備に、病院病理医の視点を持って貢献したいと考えたためです。特に、がん診療に関わる立場から、診療での免疫染色やコンパニオン診断における諸問題の解決や診断困難例に対する制度の拡充を図りたいと考えております。どうぞご支援をお願い申し上げます。
	都築 豊徳	愛知医科大学病院 病理診断科	近年の医学の進歩は目覚ましいですが、病理による貢献も多大です。それ故に更なる貢献が期待されています。その一方、恒常的な人員不足と日常業務の増加及び研究へ要求結果が求められています。私は現在まで人体病理学に関する業務、若手人材育成、研究及び国際関係に携わってきました。また対外的にはWHO 第5版のstanding memberとして日本の優れた点を提示してきました。病理学の更なる発展には、人体病理と実験病理との融合を進め、積極的に海外の病理学会あるいは病理医と交流することを通じて、診断技能の向上のみならず、リサーチマインド及び国際感覚を持った病理医の育成が必要と考えています。更には、人工知能等を有効活用してワークライフバランスを充実させ、労働環境を改善したいと思っております。これにより、次世代にとっても病理専門医が魅力ある職業になるよう努力します。病理学会会員の皆様のご支援をお願い申し上げます。
	佐々木 毅	東京大学大学院医学系研究科	この度、全国区理事に立候補いたしました佐々木毅と申します。これまで2期、全国区理事として病理学会の渉外担当役として立法府や厚労省、文科省、総務省などの行政府との橋渡しを務めて参りました。診療報酬改定をはじめ、がんゲノム医療中核拠点病院・拠点病院・連携病院の施設要件等に関する検討会の構成員や分子病理専門医制度立ち上げの一員として、また総務省遠隔医療・遠隔病理診断実証実験班の座長、希少がん診断のための病理医育成事業の国庫補助金獲得から事業開始および期間延長の折衝役などを務めて参りました。これまでの活動や立法府・行政府との人脈を活かしながら引き続き病理学会の渉外担当役として病理学会事務局の支援の下、事務局と一体となって、また我々を支えて下さっている日本臨床衛生検査技師会とも協力し、今後の2年間でやり残した課題実現のためこれまで以上に努力する所存です。ご高配のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

選出区分3：口腔病理部会長兼全国区選出理事（歯科医師免許所有者） 1名

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
口腔病理部会長兼全国区選出理事	清島 保	九州大学大学院歯学研究院	今期に続き、次期口腔担当に立候補させて頂きたく存じます。これまで口腔病理部会を担当された先生々の行動目標や課題を引き継ぎ、皆様の多大なるご支援ご協力のもと整備を進めて参りました。令和2年度末、検討していました“口腔病理専門医の資格更新についての細則”の変更が理事会にて承認され、施行となりました。また、病理診断と関連した分子病理学的な専門性の高い知識を有する分子病理専門医（口腔）の育成も開始されます。このような口腔病理専門医制度運営委員会における種々の活動を通じ、口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的提供に努めます。微力ではございますが、精一杯口腔病理部会の発展のために尽力する所存ですので、何卒ご支援、ご協力の程心よりお願い申し上げます。また、これまで同様、皆様の口腔病理へのご理解と共にご支援およびご教授頂ければ幸甚です。

選出区分4：監事 2名

※表記は応募順

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
監事	横崎 宏	神戸大学大学院医学研究科病理学講座	私は昭和58年広島大学医学部医学科を卒業後同病理学第一講座博士課程大学院生として日本病理学会に入会し、爾来一貫して病理学研究、病理診断の研鑽を行って参りました。平成4年には日本病理学会評議員に選出され、平成14年神戸大学異動後は近畿支部に所属し、同幹事会・副支部長（学術委員会委員長）を経て平成30年から現在まで支部長（地方区理事）として主として近畿地区における病理医・病理学者の育成、学術的支援に努めて参りました。この度の立候補に際し、近畿支部における運営費スリム化を含めた業務、財産管理活動と他学会（日本がん転移学会、日本分子腫瘍マーカー研究会）監事としての実績をもとに、一般社団法人日本病理学会の適正な業務及び財産状況の維持・管理に務め、本学会の更なる発展に貢献したいと考えています。
	渡辺 昌俊	三重大学医学部	三重大学医学部腫瘍病理の渡邊と申します。卒後30年経ち、学内あるいは学外においても恩返しの際が来たと考えております。ここに病理学会監事に立候補し、誠実かつ正確な仕事で学会に恩返しをいたしたいと思っております。よろしくご支援申し上げます。